

一之瀬脳神経外科病院には不肖私の書いた作品が二点ある。揮毫というには当たらないが、自分としてはいい作品の方である。

1. 修身齐家治国平天下 (136x34 cm)
2. 客愁随月郷夢遂雲追帰 (174x54 cm)

この二点について少しく注釈を試みたい。

1. 「修身齐家治国平天下」の意味は分かりやすくいえば、「人が天下を治めるには、まず自分の行いを正しくし、次に家庭をととのえ、この上で国家を治めて天下を平和にすべきである」ということである。この言葉は、信州大学脳神経外科教室の初代教授杉田虔一郎先生が昭和53年に赴任された当初、助教授の私ならびに一之瀬良樹先生を含む教室員達に語ったことで、杉田教授ご自身の努力目標、座右の銘でもあったとも考えられる。私自身は、当時新設の教室で、杉田教授を中心に兎に角、日夜何んとかしっかりした教室を作りたいと真剣になっていた時であったので、ハタとまず自分の家庭はどうなっているのか心配になった。この「修身齐家治国天下」は儒学の教えを記した経典の四書五経の中の四書の一つ大学に記された言葉である。四書は大学の他に論語、孟子、中庸がある。自分の家もさることながら、自分自身はどうであろうか。

私が小学校に入ったのは太平洋戦争末期であった。戦時中とて小学校は国民学校と呼ばれていた。そこで大切な科目が「修身」であった。現在でいう「道徳」である。道徳教育がそもそも必要かどうかは問題となっている現代の日本であるので、「修身」イコール「道徳」というよりは、道徳は身を修めるため必要なものの中で「道徳と倫理」と考えてよさそう



である。つまり「修身」すなわち「身を修める」の意味は家、国へと自分の思いを発展するための基礎固めに必要な事柄で、道徳のみならず知識、教養一般をも含めて自己修養すべきものと考えてよいのではなかろうか。

2. 「客愁随月郷夢遂雲追帰」の読み下しは「客愁は月に随って満ち 郷夢は雲を遂って帰る」。概訳は「旅路の愁いは月を眺めるたび深くなり、故郷の夢は流れゆく雲を追ってよみがえる」。作者は、清代の官員で詩人、施閏章（しじゅんしょう）で、おそらく地方に任官された時故郷を懐かしんで詠んだ詩と思われる。

昨年（平成 29 年）春、松本市美術館で「外科医二人展」と称して相澤病院呼吸器外科の北野司久先生の写真と私の書の個展を開催した。偶々、一之瀬良樹院長が訪れ見ていただいた。その時、院長に「何か気に入った書があったら差し上げたい」と申し出たところ、この書がいいといわれたもので、ある展覧会で入選した作品で、私自身もまああの出来映えと思っていたものである。ただ作品が大きすぎた（一畳ほど）ため、表具するにせよ額装するにせよ、高額であること、また表装したにせよ個人宅では大きすぎて飾れない事情もあり、そのまま折りたたんで保存していた。個展での展示は、展示担当の青木孝一郎氏が、工夫して一時的に簡易額装をしてくれた。先般本作品が、一之瀬病院の新築棟廊下に本格的に額装されて掲げられたのを見て嬉しかった。書を趣味としているが、作品は練習した何十枚の一つである。雅号は穹人。



【額装された書】

（信州大学名誉教授）